

「ヘーゲル『精神現象学』における物への問い」

上田 尚徳（本学社会研究科博士課程）

本発表はヘーゲル『精神現象学』の「Ⅱ知覚」章における「物」の概念を検討するものである。なぜヘーゲルの「物」概念に着目するのか。それは、「物」という意識の外部にあるものを前提として議論を構成するのは实在論の立場であると考えられ、それゆえに、ヘーゲルの「物」という概念について検討することは彼が实在論に対していかなる態度を示したかということをも明らかにすることにつながる、と考えられるからである。

とはいえ、ヘーゲルが「物」概念を提示しているからといって、それは彼が实在論者であるということの意味しない。むしろ事態は反対である。トイニッセンの指摘するように (Theunissen, Michael. *Sein und Schein*, Suhrkamp, 1980.)、ヘーゲルの方法は提示と批判の一体化したものである。言い換えれば、ヘーゲルはある哲学的立場を批判する際、その批判すべき相手の立場を提示しそれに徹底的に内在し、それが自らの立場を維持できなくなる場面、すなわち議論が自壊する場面を提示することで批判を行っていく。このようなヘーゲルの「方法論」を考慮するならば、ヘーゲルが「物」概念の検討において「物」を素朴に前提にしているのではなく、むしろそのような哲学的態度が批判的に検討されていると考えるべきであろう。それゆえ、彼の「物」概念を検討することは「物」を前提にした实在論的立場に対する批判を提示することになる。

以上のような想定のもとに立ち、本発表は、さらに实在論的立場の批判を通じて示される彼の観念論の一端を提示する。というのも、ヘーゲルは「物」が意識の外部にそれだけで存在することの不可能性を提示し、そこから「物」の成立に不可欠なものとしての意識の作用を提示しているからである。いささか大胆に言うならば、「Ⅱ知覚」章においてヘーゲルは实在論から観念論への大きな一歩を踏み出しているのである。それゆえに、「物」の概念を検討することは『精神現象学』のひとつの概念を検討することに留まるものではなく、『精神現象学』全体を理解する上で極めて大きな役割を果たすものである、と言えよう。

このような重要性にもかかわらず、「物」の概念の検討はヘーゲル研究において十分になされてきたとは言いがたい。その理由の一つに「Ⅱ知覚」章のもつ、晦渋な『精神現象学』の中でも際立った難解さがあげられるだろう。ヘーゲル研究の大家であるイポリットですら「知覚の議論を詳細に追うことは難しい」と二回も書きつけているほど (Hyppolite, Jean. *Genèse et structure de la Phénoménologie de l'esprit de Hegel*, Aubier, 1946.)、「Ⅱ知覚」章は難解を極める箇所なのである。安易な理解を拒絶するその叙述は、ヘーゲル研究者を大いに悩ませてきた。

本発表では、このようにこれまで顧みられることのなかった「Ⅱ知覚」章を整理し、「物」概念を明らかにすることでヘーゲル哲学の实在論に反対する観念論についてのひとつの視座を提示したい。